



イ ジェボン
李在奉 著

『韓国近代文学と文化体験』(国学資料院、2011年)

이재봉 『한국 근대문학과 문화체험』 국학자료원, 2011

(1) 李在奉『韓国近代文学と文化体験』国学資料院、2011年。

釜山大学校国文科教授の著者李在奉は本書で、1910年代を中心とした新聞や雑誌などの近代メディアと書簡、そして近代的時空間と、これにかかわるいくつかの概念を分析することで、近代の文化的形式がどのように作文に影響を与えたのかを分析した。

新聞を通した近代的作文が文学に与えた影響については「近代啓蒙期の新聞メディアと近代の作文—『毎日新聞』を中心に」で論究されている。著者は『毎日新聞』(1898～1899)のような近代メディアが登場するとともに公的領域で「国文」選択は本格化し、これを通じての作文方法の変化は漸く近代文学の定着に一助したという。ところが、帝国日本が朝鮮を植民地化することによって、徐々に「国文」は「日本文」を、もともと「朝鮮」という意味であった「内地」は「日本」を意味するようになった。これに対し著者は、『内地』の論理と近代初期朝鮮の作文」で、かかる変化が1910年代以後朝鮮の作文ジャンルに与えた影響を分析した。「書簡の形式と告白の形式—1910年代告白の談論と関連して」は、1910年代の文学的状况において「書簡」という様式が持つ意味を分析した論文である。当時、新聞などのメディアを通じて漸く公的談論ディスカールの地位を得ていた「手紙」という作文の様式は、結局1920年代に入って「書簡体小説」というジャンルの形成に影響を与えもしたと、著者は述べている。このような作文を通して「人生」・「生活」などのような概念が「社会」・「現実」などの観念と結合して文学に働きかける過程に注目したのが「韓国近代小説における人生と生活の発見」である。

これらよりさらに根本的な視点から、近代知識が形成される過程と、その知識が文学に影響を与える様相を描こうとしたのが「近代の知識体系と文学の位置」である。この論文で著者は、兪吉濬ユギルチュンの紀行文集『西遊見聞』(1895)や崔南善チェナムソンの唱歌「世界一周歌」(1914.10)などの例を挙げながら、「情」あるいは「審美」のような私的・主観的な領域に属する文学・芸術が他の知的領域と等しい地位を獲得する過程を叙述した。芸術家の私的領域を確保していく作家が近代資本と葛藤する様相は「近代的『時間』観念と文学の存在方式—梁建植ヤンゴンシクの『帰去来』を中心に」で紹介される。梁建植の短編小説『帰去来』(1915.8)では、芸術性を考える作家と商業性によって時間を統制しようとする編集長との緊張関係が作品の美的意匠から流過程にまで及ぶ影響が見事に表された。

だが、芸術のような私的・主観的領域がついに「民族」の啓蒙を志向したこともこの時期の特徴であった。「近代私的空間と文学の内面空間」は、近代初期の朝鮮人留学生たちの寄宿舎や下宿部屋のような私的空間は、文学的思考の内密性を形成するが、時には同類の知識人どうしの内密性が交わって社会化する場

所としても機能したという。このように留学生たちが社会化する過程は「近代的欲望への追求と叙事化方式—1910年代小説の苦学生モチーフと『資本』の論理」ででもうかがえる。「苦学生」モチーフの小説に表れる「資本」への欲望は民族的レベルにまで広がって啓蒙の論理を帯びるようにもなったのである。

近代とともに強まった「資本」所有の欲望はただ留学生だけのものではなかった。「間接的近代体験と叙事の話法—1910年代新聞短篇と『カネ』の叙事」で著者は、富の蓄積という個人的欲望は民族の新文明建設や繁栄などの課題にまでつながると説く。「文明の欲望と歪曲された近代—近代初期朝鮮の博覧会と文学的対応談論」は、かかる「富」に向かう近代文明の欲望が博覧会をめぐるどのような方法で談論化するかを考察する。白大鎮^{ベクテジン}の短編小説『愛児の出発』(1915.9)や安国善^{アングクソン}の小説集『共進会』(1915.8)などを通して著者は、近代的欲望と歪曲された近代との亀裂とすき間をかいまみせる近代初期の博覧会をめぐる談論を示した。

以上、著者は近代を観るうえで、微視的なものを「文化的眼差し」で観察することで、巨大談論が見逃していたことを現そうとした。文学の存在基盤としての公論の場の変化を追跡し、近代的メディアを通じて文学概念の変化、そしてメディアと文学との相関性を問う作業を行うことで、近代文学の様々な可能性を探ろうとしたのは、この本の長所であるといえる。



わたなべなおき ファン ホドク キムウンギョ
渡邊直紀・黄鎬徳・金應教 編

『戦争する臣民、植民地の国民文化』(ソミヨン出版、2010年)

김응교, 황호덕, 와타나베 나오키 편

『전쟁하는 신민, 식민지의 국민문화』소명출판, 2010

(2) 渡邊直紀・黄鎬徳・金應教 編『戦争する臣民、植民地の国民文化』ソミヨン出版、2010年。

本書は東京の武蔵大学日本・東アジア文化学科教授、渡邊直紀を中心に、2006年の春から現在まで同大学で韓国近現代文学を研究してきた「人文評論研究会」の成果物であり、植民地末の文学及び文化現象に関する論文からなっている。

第1部「戦時下知的協力の論理構造」では、主に植民地末の文学及び思想の全体像を眺めた論文、ことに「協力の論理及び倫理」にかかわる論文を載せた。「植民地末期」という時代標識は、日中戦争以後の戦時体制、「非常事態(例外状態)」という非決定性/超決定性の世界に対する把握を妨げる要素として作用することが多かった。車承棋^{チャスンギ}は「『事実の世紀』、偶然性、協力の倫理」で、白鐵^{ベクチョル}、林和^{イムファ}、兪鎮午^{ユジン}、金南天^{キムナムチョン}などの例を分析しながら、戦時/非常事態に達した「事実の世紀」の「協力の倫理的空間」を描いた。三原芳秋^{ミハラヨシアキ}は「崔載瑞^{チェジェソ}の Order」で、京城帝大時代の崔載瑞の英文学研究が以後彼の遍歴においてどのように貫通、屈折するかを解明した。渡邊直紀は「植民地朝鮮のプロレタリア農民文学と『満州』—『協和』の叙事と『再発見された農本主義』」で、李箕永^{イギヨン}の長編小説『大地の息子』(1939～1940)

と『處女地』（1944）、そして韓雪野^{ハンソリヤ}の長編小説『大陸』（1939）を分析するなかで、プロレタリア文学から民族協和にいたる李箕永・韓雪野の文学的かつ思想的転換を「満州ユートピアニズム」と「再発明された農本主義」という二つのキーワードを軸として解明した。

第2部「世界・帝国・ローカル文化の位階と苦痛のネットワーク」では、主に帝国文化の位階及び少数者文学のネットワークを論じた論文を載せた。ここでは、世界と帝国の位階によって生じる翻訳の政治、人種問題、少数者文学の問題などが取り上げられた。黄鎬徳は「帝国日本と翻訳（なき）政治—^{ルーシェン}魯迅—^{ロンインゾン}龍瑛宗—^{キムサリヤン}金史良、『阿Q』的生と主権」で、帝国日本の文化編制下で魯迅を媒介にして行われた朝鮮の金史良と台湾の龍瑛宗との対話を手掛かりにし、日本語という常例のなかに朝鮮（語）という例外的瞬間を指定し続けようとした金史良の文学に潜在する主権的力について論じた。テッド・ゲーセン（Ted Goossen）は「歪んだ童心—金史良の『光の中に』とジョイ・コガワ（Joy Kogawa）の『オバサン（Obasan）』で描かれた人種差別の問題」で、金史良の日本語小説「光の中に」（1939）と、日本系カナディアン^のジョイ・コガワの英文小説『オバサン（Obasan、邦題『失われた祖国』』（1981）との比較を通じて、「エスニック文学（ethnic literature）」あるいは「移民文学（immigrant literature）」におけるこどもモチーフの持つ意味を論じた。^{クオン}權ナヨン（Nayoung Aimee Kwon）は「帝国、民族、そして少数者作家—植民地私小説と植民地人再現の難題」で、帝国及び民族文学のなかで包含と排除が繰り返されてきた金史良の文学を分析した。

第3部「詩学・政治・資本—国民文学の理念と市場」では、国民文学の旗幟のもとで創作された実際の創作物とその流通の仕組みについて論じた論文を載せた。金應教は「日帝末の朝鮮人の書いた日本語詩の展開過程」で、国民文学論と朝鮮人の書いた日本語詩の連動と、いわゆる日本語「国民詩」の展開過程をそれぞれの時期の特性別に論じた。彼は数多くの「戦争参与詩」とは異なる、「協力と抵抗」との間で拮抗する^{キムイオク}金二玉と^{キムジョンハン}金鍾漢に注目した。^{シムウォンソプ}沈元燮は「金鍾漢の転向過程について」で、金鍾漢の遅れた「転向」過程とその終着地である新地方主義論について論じた。様々な変化過程の最後に金鍾漢が見せた「新地方主義論」は植民地の国民文学が持つ一握りの不穏性を現す意味深長な事例であると沈元燮はいう。^{クァクヒョンドク}郭炯徳は「植民地時代^{マヘソン}馬海松の行跡と日本雑誌—菊池寛、『モダン日本』、朝鮮芸術賞を中心に」で、当時帝国と植民地朝鮮の文化をつなぐ重要な役割を果たした馬海松の日本大学での行跡と、その後の日本文化界での役割を検討した。^{イジョンホ}李鍾護は「出版新体制の成立と朝鮮文壇の事情」で、1940年第2次近衛内閣の出帆で成立したいわゆる「出版新体制」という新しい文化生産システムの台頭が植民地朝鮮の言語秩序に及ぼした影響を論じた。この「出版新体制」は単純な検閲だけではなく、出版物の生産・流通・消費領域に対する全面的統制をもたらす一方、日本出版文化協会を軸に「流通の広域化」を実現することになった。

第4部「メディア・表象・国民文化」は植民地末期のプロパガンダ映画及び演劇を扱った二本の論文と1960年代映画に関するその他一本の論文からなっている。^{イジュヨン}李ジュヨン（이주연, Jooyeon Rhee）は「プロパガンダ映画に現れたジェンダー（gender）と国家—『サムライの娘』と『望楼の決死隊』を中心に」で、帝国日本の国策映画『サムライの娘（Die Tochter des Samurai、邦題『新しき土』』（1937）と『望楼の決死隊』（1943）に現れた土と女性のイメージを通して近代の超克談論^{ディスクリール}と大東亜共栄圏イデオロギーが映画にどのように反映されたかを考察した。^{イジュミン}李裁明は「植民地朝鮮の国民演劇研究—朝鮮演劇文

化協会の活動を中心に」で、朝鮮演劇文化協会の活動を中心に植民地末期朝鮮の国民演劇が露呈した問題等を検討した。李英戴^{イヨンジェ}の「無法と犯法、クーデタ以後のならず者—1960年代韓国の活劇映画の二系列」で、大韓民国という後期植民国家がどのように自分の前史を「法的安全網」のなかで再構成するかを探った。

近年、韓国と日本、アメリカなどでは植民地朝鮮の文学および文化をテーマにした高いレベルの研究成果が次々発表されている。異なる国籍を持ち、異なる言語を使用している研究者たちが集まって出した本書は、韓国近代文学研究、植民地末の文化現象について多様な視点から接近できる求心点になりうると思われる。

[訳：金政権]